研究ノート

物語からみたイギリスの歴史

小峰和子

ＮＨＫ文化センターで「イギリス紀行」という講座の一部を三ヶ月間担当することになった時、どのような内容にしたら社会人の方に興味を持って頂けるか迷った。自分の専門は児童文学なので、児童文学とイギリス紀行をどう関連づけようか考えた末、「イギリスの歴史を物語りで辿る」ことにしようと決めた。

イギリス児童文学の中には、「歴史小説」というジャンルがあって、イギリスの歴史と風土に深く根ざしたものが多い。そこで「歴史小説」の中からいくつかの傑作を取り上げて、物語を通して紀元前のケルト社会から現在に至るまでの歴史を再確認することにした。

そこでどんな作品を取り上げたのか、またその作品は時代とどう関わっているのかについて簡単に述べてみたい。

先ず、ローマに支配される以前の初期鉄器時代を背景に書かれたものに、ローズマリー・サトクリフ（Rosemary Sutcliff, 1920-92）の『ケルトの白馬』（*Sun Horse, Moon Horse*, 1977）がある。

オックスフォードから三〇キロほど離れたアフィントンという村には、山の斜面に全長一一一メートルの白馬の地上絵が今も残っている。山の斜面の土を削り、白亜質の部分で描かれた躍動する馬の姿は、一体いつ誰が何のために作ったものなのか？　ケルト時代のものらしいということ意外は知られていない。

『ケルトの白馬』の中でこの絵は、ケルトのイケニ族が、アトレバーテス族に襲われた時、囚われて奴隷となってしまったイケニ族の仲間を救うために、族長の息子ルブリンが、敵の族長と取り引きするために描いたことになっている。

古代ケルト社会では部族間の争いが絶えず、常に他の部族の襲撃に備えていた。「馬族」であるイケニ族は、戦車を引くように調教された軍馬をたくさんもっていたので、他の部族に狙われ、族長以下戦士である男たちは、皆殺しにされてしまった。三男坊であるために女、子ども、老人たちを守るよう砦に残されたルブリンは、敵の族長に、土の上に絵を描く才能を認められ、殺されないでいる。ルブリンは、僅かに残った部族の民を解放す

るために、地上絵を描くことを承知する。絵が完成すれば、自分の命を失うことは覚悟の上で。

ローマがブリテン島支配を始めた紀元前一世紀中頃のスコットランド北東のオークニー諸島を舞台にしたものには、モリー・ハンター（Mollie Hunter, 1922- ）の『砦』（*The Storonghold*, 1974）がある。オークニー諸島には他には見られない独特の形をした砦が五〇〇近くもあるという。ある日この砦の廃虚に立ったモリー・ハンターは、「これはある人のアイディアから生まれたものに違いない」と思い、『砦』の物語を考えついたそうだ。

ケルト「猪族」の青年コルの両親は、奴隷狩りのローマ軍に連れ去られてしまった。まだ幼かった彼は、母親から引き離される際、岩に投げつけられたために、片足が不自由だった。度重なるローマの奴隷狩りに苦しめられる猪族は、徹底抗戦を主張するドルイド神官と、身を隠すことを主張する族長の間に対立が生じていた。

足が悪く戦士として戦えない一八歳のコルは、戦うのでも逃げるのでもない第三の道を長いこと模索していたが、そのアイディアがもうすぐ形を成そうとしていた。

部族民の死後の世界までをも握っている宗教上の指導者と、部族のまとめ役である族長との対立、コルが密かに愛する族長の娘の生け贄など、さまざまな困難を乗り越えて、ついにはコルの考えた「守りに徹する砦」を一致協力して建設し、ローマ軍の奴隷狩りから部族を守ることに成功する。

四〇〇年以上にも及ぶローマ支配時代のブリテン島には、さまざまな人間ドラマがあったはずだと考えたサトクリフは、『第九軍団のワシ』（*The Eagle of the Ninth*, 1954）『銀の枝』（*The Silver Branch*, 1957）『ともしびをかかげて』（*The Lantern Bearers*, 1959）のローマ・ブリテン三部作を始め、数多くの歴史小説で、歴史の中で運命に翻弄される青年の苦悩と精神的成長を描いている。

『第九軍団のワシ』では、ローマの騎士階級の出身で一八歳の青年マーカスが主人公である。司令官としてブリテンに派遣されたマーカスは、負傷して兵士としての出世の望みを絶たれてしまう。ローマ軍を引退後もブリテンに残っている叔父の家で療養中、マーカスの父が副司令官として率いていた第九軍団四〇〇〇名が、北方氏族を平定に赴いたまま、軍団の旗印と共に跡形もなく消えてしまったことを耳にしたマーカスは、真実を求めて、変装して北に向かう。マーカスはついにワシを見つけ、奪い返し、ローマの元老院に報告するが、第九軍団の名誉回復は認められず、ワシを叔父宅の祭壇の床下に隠す。マーカスはローマに戻らず、隣家のケルト族の娘と結婚し、ブリテンに残ることを決心する。

『ともしびをかかげて』は、紀元四一〇年頃が舞台となっている。ローマ軍の兵士ではあるがブリトン人のアクイラは、

ローマ軍がブリテンから撤収する時、軍と行動を共にするか、或いは故郷であるブリテンに留まるか悩んだ末、ついに軍から脱走し、故郷に帰る決心をする。しかし故郷での平和な暮らしもつかの間、サクソン人に襲われ、父は殺され、妹はさらわれ、アクイラも奴隷となってしまう。やっと巡り会えた妹は、父を殺した敵の妻となり、息子をもうけていた。その妹の手引きで敵の手から逃れたアクイラは、戦場で妹の息子と再会することになる。

サトクリフの歴史小説は、イギリスの歴史教科書の中では一頁しか書かれていないローマ支配時代にも、多くの若者たちが運命に翻弄されていたことを語っている。

歴史小説ではないが、一一二〇年頃に建てられたケンブリッジに近い古いマナー・ハウスに住んでいたルーシー・ボストン（Lucy Boston, 1892-1990）は、その館を舞台にグリーン・ノウ・シリーズを書いている。その中の『グリーン・ノウの石』（*The Stone of Green Knowe*, 1976）は、まさにその館が建てられている最中の物語である。

物語の中で一一歳の少年ロジャーの祖父は、イギリス王朝の始りであるノルマン公ウィリアムと共にフランスからやってきた貴族だといっている。またロジャーが未来にタイム・スリップすると、子どもたちは皆英語を話していて、フランス語が通じないで困る。このことからもイギリスでは、一〇六六年のノルマン・コンクェスト以来、一四世紀の対仏百年戦争で英語が復権するまで、貴族の言葉や公用語はフランス語だったことが分かる。

テューダー朝のヘンリー八世は、世継ぎがほしくて、妻を何度も変えたり、カトリックから脱会し、英国国教をつくったことで有名だが、やっと生まれた世継ぎのエドワード六世は短命だった。次に王位に就いたメアリーの時代は、宗教上の争いで血なまぐさいことが多く、「血のメアリー」といわれている。父と異母姉との間にあって、比較的穏やかだったエドワード六世の時代を舞台に、かのマーク・トウェイン（Mark Twain, 1835-1910）は『王子と乞食』（*The Prince and The Pauper*, 1882）を書いている。

王子と乞食の少年が、同じ日に生まれ、顔もそっくりで、入れ替わるというストーリーに現実味はないが、物語は波瀾万丈で面白い。ヘンリー八世崩御のあと、偽の皇太子が戴冠する直前に本物の王子が現れるが、本物である事を証明するのに玉璽を持ち出すところなどは肯ける。

メアリーが世継ぎをもうけず死んでしまったために、思いがけず王座が回ってきたのがエリザベス一世であった。しかしエリザベスは、ヘンリー八世の娘ながら、母親の身分が低いことを理由に、カトリック派がヘンリー八世の妹の孫にあたるスコットランド女王メアリー・スチュワートを王位に就けようと画策するため、結局エリザベスはメアリーを処刑せざるを得なくなる。

アリソン・アトリー（Alison Uttley, 1884-1976）の『時の旅人』（*A Traveller In Time*, 1939）は、二〇世紀に生きる少女ペネロピーが、ふとしたことからエリザベス朝にタイム・スリップするファンタジーであると同時に、メアリー・スチュワートを助けようとして処刑されたアンソニー・バビントンの騒乱事件を題材にとった歴史小説でもある。

メアリー女王の処刑を歴史的事件として知っているペネロピーは、メアリーを救えると信じているアンソニーや弟のフランシスと出会い、彼らの願いを叶えたいと思いながらも、歴史的事件を変えることはできないと苦しむ。最後の場面でペネロピーは、自分が会っているのは、彼らのこの世での最後の時なのだと知る。

エリザベス一世が独身を通したため、次の王位はエリザベスが処刑したメアリー・スチュワートの一人息子、スコットランド国王ジェムズ六世に移るのだが、まさに歴史の皮肉といえよう。シェイクスピアは、イングランドではジェームズ一世であるこの国王へのオマージュとして『オセロ』『マクベス』『リア王』などの悲劇を捧げたといわれているが、アメリカ人ゲアリー・ブラックウッド（Gary Blackwood）は、エリザベス朝の最後の二年間を背景にシェークスピアを巡る物語を書いている。『シャークスピアを盗め！』（*The Shakespeare Stealer*, 1999）では、前のご主人様から速記術を習ったヨークシャー出身のウィッジという一四歳の少年が、その腕を見込まれ、買われた新しいご主人様から、ロンドンのグローブ座で上演中の『ハムレット』の台本を速記して盗めと命令される。

当時芝居の台本は、各役者が自分の台詞のところだけを配られていて、芝居全体の台本はなかったそうだ。従って芝居全体を盗むには、聞いた台詞を速記するしかなかったのである。しかし速記に失敗したウィッジは、次に役者として宮内大臣一座に入るが、続編の『シェイクスピアを代筆せよ！』（*Shakespeare's Scribe*, 2000）は一六〇二年の夏が背景である。ロンドンでペストが再発したため劇場が閉鎖され、劇団は旅回りを余儀なくされ、各地を転々とするが、途中で座付き作者のシャイクスピアさんが右腕を骨折してしまい、今や座付き役者となったウィッジが、新作芝居を速記で書き取ることになる。

この二作品ともに、ウィッジなどほんの少数の登場人物を除いて、ほとんどが実在の人物だという。当時の社会や特に芝居を巡る騒動が目に見えるように詳細に描かれていて興味深い。

歴史をみるとロンドンは、たびたびペスト禍にみまわれているが、一六六五年が特に酷かったようである。そのペスト菌は、ロンドンだけに留まらず、地方の村にまで運ばれたことが、ジル・ペイトン・ウォルッシュ（Jill Paton Walsh, 1937-）の『死の鐘はもう鳴らない』（*A Parcel of Patterns*, 1983）で分かる。

ロンドンから到着した洋服の型紙の小包に付いて来たペスト菌によって、ダービシャーの小さな村は、人口の三分の二を失ってしまう。

一六歳の少女モールは、この村でただ一人字が書けて読める娘で、他の娘たちからよく代筆を頼まれていた。ピューリタン革命以降、村の牧師は清教徒の牧師様となり、娘たちがリボンで身を飾ることも、ダンスをすることも禁じられていたが、王政復古後は、国教会の牧師も赴任してきて、村祭りも再開されることになる。

一六六五年の雨が多かった夏、村がペストに見舞われたとき、それまで意見を異にしていた二人の牧師は、協力して村と近隣の村を守る。やがて秋が来て、教会の鐘の音がもう鳴らなくなったとき、全てを失ったモールは、生きる希望を失い死を待ち望んだが、そんなモールの前に一人の青年が現れ……

スコットランドを併合したいというイングランドの長年の野望は、一七〇七年条約による合併という形で実現する。しかし王朝がハノーヴァ朝に変わると、スチュワート朝の復活を目論むジャコバイトの叛乱が起こる。その頃のスコットランドを舞台にした冒険歴史小説が、スティーブンソン（Robert Louis Stevenson, 1850-94）の『さらわれたデービッド』（或いは『誘拐されて』）（*Kidnapped*, 1886）である。

郷士の息子だが孤児となった17歳のデービッドは、父の手紙を持って叔父の屋敷に行くが、守銭奴の叔父は、財産を分けるのを嫌がり、奴隷船の船長にデービッドを誘拐させる。アメリカ植民地に向かう途中、難破船から救い上げられたアラン・ブレックと共に船長や船員と戦う。ついに船長が降伏し、近くの港で解放すると約束したが、船が難破し、デービッドは一人島に打ち上げられる。

人家に助けを求めると、アランからの言付けが待っていて、アランも助かったと知る。アランとの待ち合わせの場所に向かう途中、ある事件に居合せたことからデービッドは、指名手配されてしまう。

やがてアランと再会したものの、ジャコバイトのアラン共々追われる身となった二人は、高地地方で長く苦しい逃避行を続ける。

やっとエジンバラに辿り着き、弁護士を頼んで、叔父からの財産分けの交渉も無事済ませたデービッドは、あんなに望んでいたアランとの別れの日、胸がいっぱいになり子どものように声をあげて泣き出したい気持ちになる。

ジャコバイトのアランとホイッグ党のデービッドでは、政治的立場は相反するが、苦しい逃避行を続けるうちにいつしか友情が芽生え、いざ別れるとなると、デービッドは歩けないほどの淋しさに襲われる。デービッドと共に逃避行を体験した読者は、その淋しさに共感しながら、当時はスコットランドの民族衣装も、バグパイプも、武器の携帯も禁止されていたことなど、イングランドとスコットラ

ンドの関係も詳しく知ることができる。

ヴィクトリア女王が六五年間も在位したあと、エドワード七世から間もなくジョージ5世へと王位が移るが、その頃を背景に書かれたのが、K・Mペイトン(K.M.Peyton ,1929-)の「フランバーズ屋敷の人々」(*Flambards*, 1967-81)である。五歳で孤児となったクリスチナは、一二歳のときに母の実家であるフランバーズ屋敷の叔父のもとに引き取られる。その一九〇八年から、第一次大戦をはさんで一九二一年まで、つまり一二歳から二五歳までのクリスチナの愛と苦悩を描いた四部作(邦訳は五部)からなっている。

時代は馬から自動車、飛行機へと変わりつつあるが、地主階級のラッセル叔父は旧態依然のままで、フランバーズ屋敷を荒れるに任せている。

父親そっくりで馬と狩猟のことしか頭にないマークと、飛行機に魂を奪われている弟のウィリアム、身分は違うが包容力のある馬丁のディックという三人の男性への思いに揺れるクリスチナの愛と青春の日々を、その時代背景を通して知ることができる。

第一次大戦からやっと立ち直ったイギリスは、ジョージ六世の時代にまた第二次世界大戦に巻き込まれる。大戦を直接描いた物語の傑作はそう多くはないが、ジル・ペイトン・ウォルッシュの『焼け跡の雑草』(*Fireweed*, 1969)とロバート・ウェストール(Robert Westall, 1929-93)の『"機関銃要塞"の少年たち』(*The Machine-Gunners*, 1975)が代表作である。『焼け跡の雑草』は、空襲下のロンドンで生き延びようとする一五歳の少年と少女の出会いと別れを描き、『"機関銃要塞"の少年たち』は、海辺の町ガーマス(作者が生まれ育ったタインマスがモデル)の中学生たちが、撃墜されたドイツ爆撃機から奪った機関銃で、ドイツ軍の侵攻に備えて要塞を作り、たてこもるという物語である。

どちらの作品も戦時下という非日常を生きる子どもたちと、建前を重視する大人との対立を描いている。

こうして時代順に作品を読んでいくと、歴史的事件、年号、王や女王の名前を暗記するだけでは見えてこないもの、その時代の中で人々が何を考え、いかに生きてきたかが見えてくる。たった数行の文献からこれだけの物語を考え付く作家の想像力の素晴らしさに感心すると共に、もし歴史の授業がこういう作品を取り上げたら、学生たちはもっと興味深く歴史を知ることになるだろうし、同時に文学の勉強にもなるのに……

かくして紀元前から始まり、二〇〇〇年も続くイギリスの歴史を、三ヶ月という短期間に眺めた駆け足の講座も二〇〇二年の暮れと共に修了した。責任を果たし、ほっとしているところに、受講生の方たちから「物語を通して知る歴史は大変に分かりやすく、楽しかったから、是非続きを!」と言われ、嬉しいような困ったような複雑な思いで、新しい年を迎えようとしている。